州立武器庫

日本語

Landeszeughaus

ガイドブック



Landeszeughaus, Universalmuseum Joanneum, Herrengasse 16, 8010 Graz,
T +43-316/8017-9810, zeughaus@museum-joanneum.at, www.museum-joanneum.at

州立武器庫の歴史

「Geräte und Vorräte（器具と在庫）」は中世では一般的に「Zeug（もの）」と呼ばれていました。15世紀以降、この概念は砲兵隊の砲兵装備を指すようになり、その保管場所は武器庫と呼ばれるようになりました。

グラーツ地域独自の武器庫の建設の始まりは17世紀中旬まで遡ります。シュタイアーマルク公爵領は、当時ハプスブルク帝国の一部であり、権力コンプレックスの南東の外部境界線に接していました。15世紀以降、公爵領はそのような立地により、ハプスブルク、ハンガリー、そして一貫して中央ヨーロッパ方面に拡大を試みたオスマン帝国による、地域の枠を越えた衝突に度々晒されてきました。

オスマン帝国の更なる拡大を阻止するため、16世紀以降、ハプスブルク帝国の前域では約70kmに及ぶ防衛回廊が次第に整備されました。現在のクロアチアに位置したこの「軍事境界線」の一部では、グラーツから武器、食料品および兵士が供給されました。とりわけそのような理由から、1642年～1647年に当時のものとしては近代的な武器・弾薬保管場所、今日の州立武器庫が新築されました。約100年に渡りこの武器庫はハプスブルク帝国南東地域で最重要な「装備品本部」となりました。この武器庫は領邦等族により出資されていました。彼らはハプスブルク領邦君主に対して、シュタイアーマルク貴族、聖職者および都市を代表しており、国防の支援を義務付けられていました。

この地域での武力紛争が減るにつれて武器庫の重要性も薄れていきました。1749年、マリア・テレジアは陸軍組織を一元化するための改革を公布しました。全ての兵器はウィーンに持ち運ばれ、既存の武器庫は全て解体されました。領邦等族の異議が功を奏し、発生する全ての費用を負担するという条件のもとで、マリア・テレジアは「この地方の歴史と祖先の勇敢さの文化財」として、この武器庫をシュタイアーマルク州民に委ねました。このようにして武器庫は1882年に初めて一般公開されました。その10年後、Joanneum（ヨアネウム）に帰属されることとなりました。

今日では、この州立武器庫は32,000点の展示物を所蔵し、現存する世界最大級の歴史的な武器庫となっており、年間1万人が訪れます。

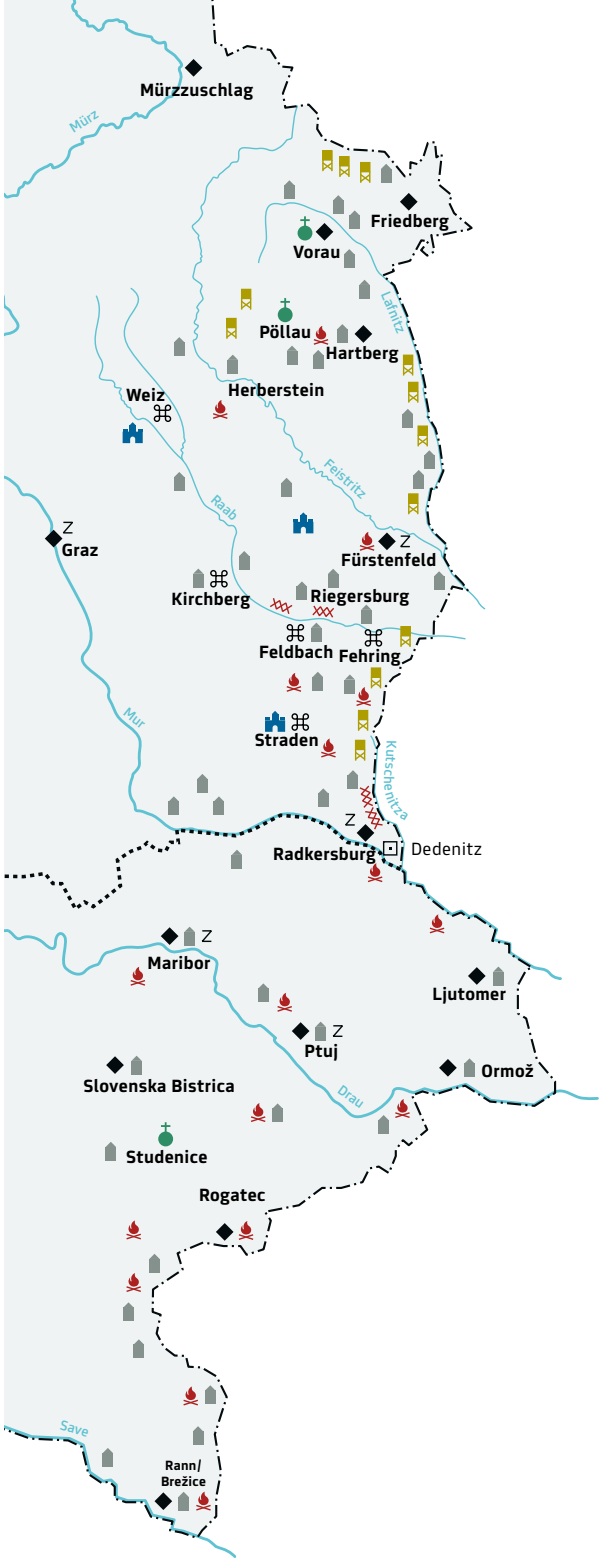


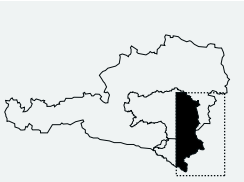
1565年頃にコンラート・リヒター（アウクスブルク）によって製作されたインナー・オーストリア領主カール2世の甲冑、州立武器庫　グラーツ

州立武器庫とシュタイアーマルク

この武器庫は近世初期、シュタイアーマルク州の防衛の中心的な役割を果たしました。とりわけ頻繁に危険に晒されたシュタイアーマルク公爵領の東部および南東部の地域や都市にとって重要な砦となっていました。

この地域は15世紀以降、紛争地帯となっていました。争い、反乱運動そして武力衝突が全世代の生活に影響を与えていました。略奪、放火、拉致そして死が日常茶飯事に起こっていました。これらの危険から身を守るため、人々は塹壕や土塁、堡塁を建設し、自らの生活圏を防衛地域へと作り変えました。また、中世の市外壁を新しい武器技法に適応させ、都市要塞が無いところには、壁、居間、倉庫および家畜小屋からなる防衛施設を建設しました。教会は強固な城壁と塔によって防衛教会へと改築されました。特定の都市では州立武器庫の支所が建設されました。しかし、ほとんどの都市、修道院施設および城塞では自衛用の武器を保管するための施設を備えていました。紛争の際には、彼らは追加の軍需物資をグラーツから調達していました。





凡例

- 要塞都市
- 防御設備
- 修道院
- 防衛教会
- 防衛設備
- 見張り塔
- 防塁、バリケード
- 信号火
- 武器庫
- 堡塁
- 当時のシュタイアーマルク州境
- 現在の州境

0 10 20 km

この地図は、15〜18世紀のシュタイアーマルク公爵領の東部および南東部国境に生じた防衛関連措置および施設の緻密なネットワークを示しています。

図：© UMJ、Katharina Schwarz、2021

州立武器庫とヨーロッパ

武器庫はシュタイアーマルク地方史の中心的な文化財であるだけではなく、近世の中央および南東ヨーロッパの支配と紛争の歴史の文化財でもあります。

ここでは何世紀にもわたる武力紛争が、人々、物資、そしてアイデアを動かしました。このようにして、ドイツで製造された兵器がグラーツを経由して、現在のクロアチアにあった軍事境界線に運ばれました。そこでは様々な出自と宗教の人々が集まっていました。シュタイアーマルクの兵士たちは、オスマン帝国から逃れて、バルカンから移住してきたギリシア正教徒の「武装農民」と接することとなりました。ヨーロッパ各地から来た傭兵たちはイタリア人要塞建築技師と知り合いました。オランダ人地図製作者はウィーンの役人とともに仕事に従事しました。旅の道中の商人は、地元住民にオリエントや西洋からの商品やニュースを届けました。オスマン帝国はその間、ハンガリーとボスニアの広大な地域を支配していました。その更なる拡大を「欧州の共同防衛政策」が阻止し、これが同盟と支援へと繋がりました。

このヨーロッパの網状組織の重要な交差点が、一人のスイス人建築家によって設計された州立武器庫でした。その所蔵品は数々のヨーロッパの様式の発展や武器技法を表現しています。そのような状況で、計画が練られ、戦略が策定されました。この武器庫は、平和という今日のヨーロッパの中心的な考え方が価値を持ったことにより、その重要性を失いました。これにより交通路や経済関係の強化が進み、公使館や大使館が設立されました。人々は旅に出て、それぞれの「他者」の印象を持ち帰りました。この発展の基礎となったのが、1718年に、これまで対立していた2つの隣国であるハプスブルク帝国とオスマン帝国との間で結ばれた「パッサロヴィッツ条約」（現·セルビアのポジャレヴァツ）でした。



軍事境界

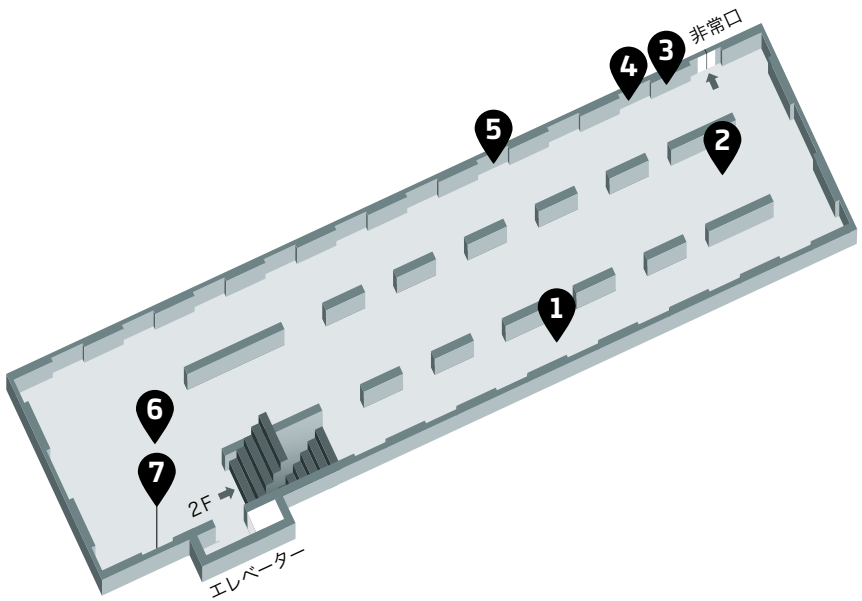
1. 海境
2. クロアチア境界
3. ヴィンド境界
4. バイチャ境界
5. ハンガリー境界

中部および南東ヨーロッパ、および16、17世紀のいわゆる軍事境界とその国境区間の領土（概略図）

図：© UMJ、Katharina Schwarz、2026

1F　銃火器

1階には主に、16、17および18世紀の銃火器が保管されています。大砲、迫撃砲、城壁銃などの火砲は防衛設備を守るために使用されました。マスケット銃は強化された射程距離と貫通力により、16世紀末期の歩兵にとって最も重要な武器となりました。騎兵はピストルやアーキバスなどのより小型で軽量な武器を使用していました。後者は長さ1mほどで、軽装備の騎兵隊は「アーキバス騎兵」と呼ばれました。



❶ 更なる技術発展により、銃火器の製造は専門的なものとなりました。鍵師、鉄砲鍛冶および銃床職人が協力して作業をしていました。16世紀の小さな私営の銃工場の多くは、17世紀にはフェルラッハ、ドイチュファイストリッツ、トラウテンフェルス、シュタイアーの大規模工場に取って代わられました。



❷ 武器の入手、保管、支給は、いわゆる用具係が担当していました。個数ではなく、重量で支払いが行われていたため、用具係はここに図示されている天秤を使用して、火砲、火薬および弾丸の重さを量っていました。



❸ いわゆる城壁銃は最大重量が32キログラムということもあり、城壁または砲眼から発射されました。



❹ 銃剣は銃身に差し込むか、銃身横の器具に押し付けて、銃を槍としても使用できるようにしました。



❺ 武器庫の屋根裏に取り付けられていた2台の牽引装置は軍事兵器を収納および移動するのに使用されました。これにより武器が入った大きなカゴを動かすことができました。



❻ 18世紀末にフランス軍がグラーツも占領しました。武器庫の砲兵廠に彼らが干渉するのを避けるため、ほとんどの大砲は現在のセルビアに輸送されました。その後、これらは売られてしまったため、州立武器庫には当初の在庫が数台残るのみとなっています。



❼ この迫撃砲は、1652年にシュタイアーマルク領邦等族の依頼により、グラーツの火砲鋳物職人コンラート·ザイザーによって製造されました。この砲兵廠には依頼主の紋章の動物であるシュタイアーマルク·パンサーが描かれています。

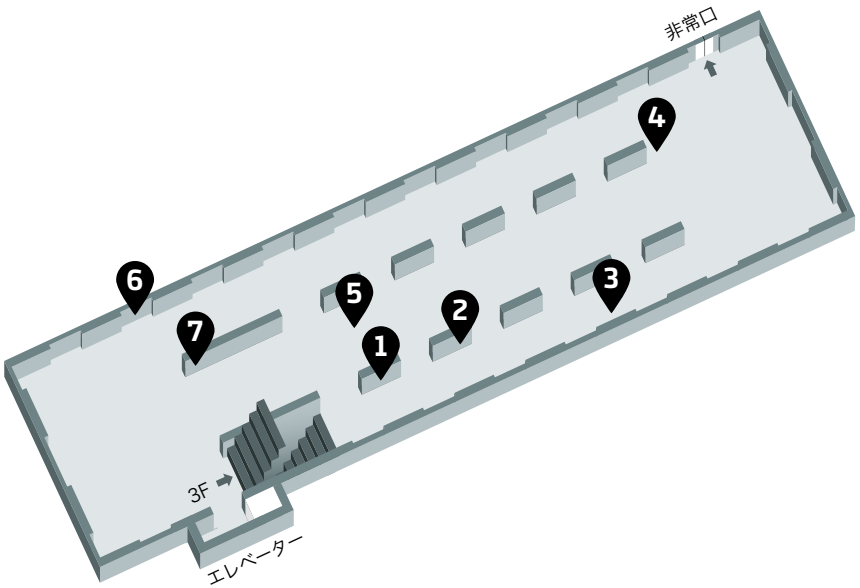


❽ 鉄の成分にとっての最大の脅威は、高湿度または対象物との不適切な接触による錆びです。それとは反対に、銃床の木材や革にとっては低すぎる湿度が問題となります。対象物を可能な限り良い状態で保存するため、現在は4人の修復技術者からなるチームが管理に努めています。



2F　兜、甲冑、ピストル

2階には主に、様々な兵種用の仕様によって定められた甲冑が展示されています。いわゆる重武装の騎兵は膝丈までの「胸甲」を着用していました。草摺を伴わないアーキバス騎兵甲冑または軽量な甲冑は「軽武装騎兵」を保護しました。徒歩で戦った「ドイツ人傭兵歩兵」たちは、特別なランツクネヒト甲冑を着用していました。



❶ 兜の種類と形は時代の流れ、および兵器技術の発展とともに常に変化していきました。騎兵用には、完全に密閉されたバイザー付き兜、および顔部分が覆われていないZischägge（ツィシェゲ）が構想されました。歩兵は目出し帽またはモリオンを被りました。



❷ シュタイアーマルクの領邦等族は、最高の甲冑師を迎え入れるために、免税措置など様々な唆しを試みました。その中には1571年にアウクスブルクから来たイスラエル·ブルクハルトがいます。彼が多額の借金によりグラーツから逃げ出した際、妻のレジーナは工房を引き継ぎ、彼女の作品で夫の債務を支払うことを義務付けられました。彼女が製造したほとんど全ての装備品は、債務の返済のための一部として差し押さえられていたため、レジーナ·ブルクハルトは大量の甲冑を納品する必要がありました。保存されている軽量な甲冑の多くは彼女の作品です。



❸ このような装備品の生産者は甲冑師と呼ばれました。彼らはブリキ製の各装備部品を特別な工具を使って形成し、革ベルトとリベットで繋ぎ合わせました。



❹ ホイールロック式ピストルは、重武装騎兵およびアーキバス騎兵の装備の一部でした。このピストルは、馬の鞍に固定された硬い革からなるホルスターに差し込まれました。



❺ 17世紀中頃まで、重武装騎兵は州動員の騎馬のエリートを構成していました。彼らの装備は最大25キログラムで、バイザー付き兜、襟、腕章、胸当てと背当て、鉄製手袋、膝丈までの草摺、および特別な保護具が提供されました。装備が比較的小さいことから、平均身長160～165cm用に製造されていたことが明らかとなっています。



❻ 上級将校用のピストルの多くは、豪華に装飾されています。この武器の装飾は象牙ではなく、牛の骨を形成したはめ込み細工によるものです。多くのホイールロック式ピストルには、特徴として球状の柄頭が取り付けられています。これらは「Puffer（プッファー）」と呼ばれ、16世紀の最後の3分の1の期間にニュルンベルクからグラーツに持ち込まれました。

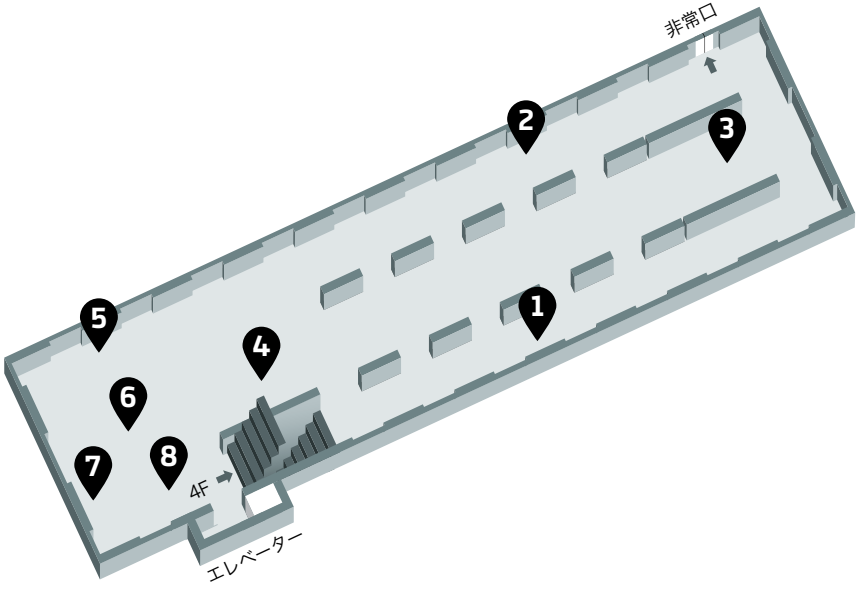


❼ 軽騎兵は編み目の細かい鎖帷子と「薄片鎧」を着用した軽武装騎士でした。騎士の可動性を確保するため、この甲冑の胸と背中部分は、革ベルトとリベットで繋ぎ合わされた複数の鉄輪で構成されていました。



3F　射撃テスト、検査印、馬鎧

3階には主に、ドイツの工房で製造された甲冑が保管されています。帝国諸侯は、オスマン帝国との対立において、インナー·オーストリアを資金面で支援する準備ができていました。というのも彼らはこの援助を、必要な軍事兵器をドイツの武器施設で購入するという条件と結び付けていました。このようにして16世紀後半、アウクスブルク、ニュルンベルクそしてズールとの交易関係が生じるようになりました。3階のもう一つの注目ポイントは貴族およびトーナメント装備用の騎士鎧です。



❶❷ いくつかの装備品では、ニュルンベルクとアウクスブルクの武器施設の検査印を見ることができます。この印は確かな品質証明として、射撃テストの代替となるものでした。





❸ インスブルックの甲冑師ミヒャエル·ヴィッツは1550年頃に、残念ながら名前が分かっていない高位の顧客のために、この豪華な甲冑を製作しました。この甲冑には、打ち出し加工を施し、磨き上げられた葉模様の装飾が施されています。この葉模様は黒の下地により装飾が際立っています。



❹ 複数の甲冑および兜には、射撃テストによる凹みが見られます。購入した装備品の品質を検査するために、武器庫に納品された一連の甲冑の中から選別された個々の構成部品を、10〜12mの距離からピストルで射撃しました。弾丸がテストした装備部品を貫通しなかった場合、全装備を購入しました。そうでない場合、甲冑師が自らの費用で代替品を手配しました。



❺ 多くのドイツ語の諺が軍事分野に由来しています。例えば、für jemanden eine Lanze brechen（誰かのために槍を折る）は、誰かのために献身的に尽力する、ことを意味します。この諺はジョストと呼ばれる槍（Lanze）を使ったトーナメント競技に由来します。トーナメント参加者は自分のために戦うだけでなく、貴婦人など他者の関心を買うために、彼らは特定の人のために自分の槍を折りました。



❻ 馬専用に製造された装備は貴重です。シュトゥーベンベルク出身のカール·グラーフは、重さ約42キログラムにもなる馬鎧を1814年にヨアネウムに寄贈しました。この鎧はインスブルックの甲冑師コンラート·ゾイゼンホーフェル、装飾はアウクスブルクのエッチング画家ダニエル·ホッファーのものとされています。



❼ いわゆる溝付甲冑は武器庫で最も古い物品の一つで、1557年の在庫品目録で既に言及されています。「溝付」という名称は、表面仕上げの特別な形状を示します。内側から打ち出された細かい溝が、16世紀初頭の比較的薄い甲冑金属板を、より強固なものにしました。それと同時におしゃれな印象を与えています。

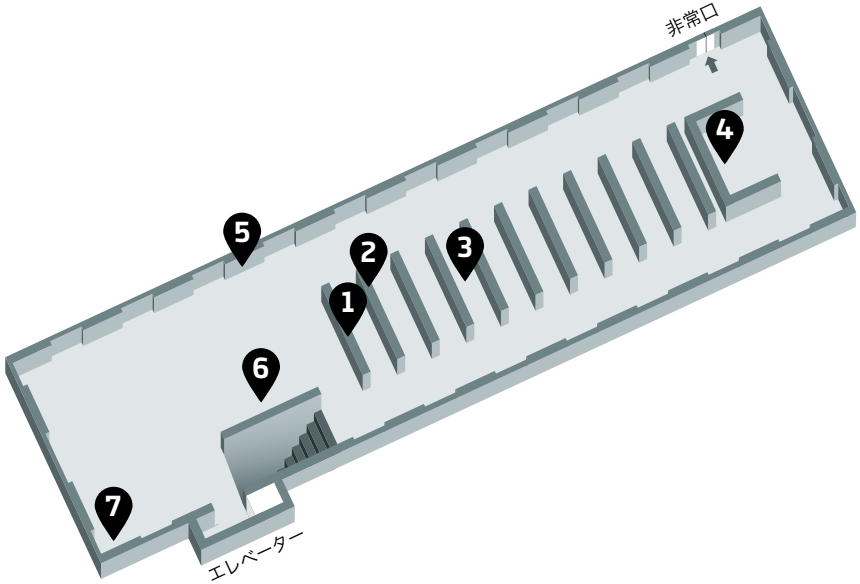


❽ ゼッカウ修道院の高墳に、インナー·オーストリア領主カール2世が全身鎧姿で描かれています。現在、この装備の原物は、この武器庫に保存されています。この甲冑は、シュタイアーマルク領邦等族による高い評価を得てグラーツに召喚された、アウクスブルク出身の甲冑師コンラート·リヒターによって製作されました。



4F　朝星棒、鉾槍、拒馬

火器の登場前、戦状では棒状兵器や冷兵器が主流となっていました。ハルバードや槍、朝星棒などの棒状兵器が長期にわたって歩兵の主要な武器であった一方で、騎士は主に冷兵器（剣やサーベル）に頼っていました。携帯火器の貫通力が増すにつれて、朝星棒は戦状から徐々に姿を消していきましたが、近衛兵の武器などの代表的な要素として使用され続けました。同様に、冷兵器も19世紀には帝国·王室の官僚の階級を示すものとなりました。



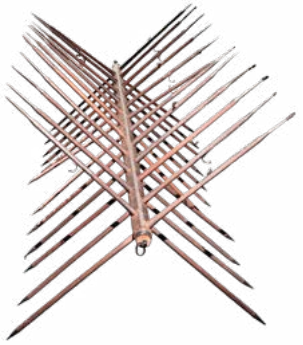
❶ 武器庫に保管されている棒状兵器の多くは、オーバーエスターライヒ州の工房で製造されたもので、複数の料金所を通り、荷車でグラーツに輸送されました。槍やハルバードは戦時上の重要な輸送物資であったため、領邦等族は領邦君主に輸送業者用の通行証を要求することにより、通常は支払う必要のある通行料を回避することができました。



❷ 1683年に、ウィーンがトルコ大宰相カラ·ムスタファの軍によって包囲された際、領邦等族はシュタイアーマルクの北方および東方境界線に脅威を感じました。十分な武装をした傭兵に加えて、農民の臣下も国境警備を義務付けられました。実戦経験の乏しい男性たちは、先端に鉄の棘が付いた棍棒が木製の棒に固定された朝星棒を携えていました。



❸ 複数の穴が空けられた横梁に槍を刺した拒馬は、騎士からの攻撃に対する防御、道や橋の封鎖、および保管場所の保全として使用されました。



❹ 棒状兵器の豪華なエッチング装飾は、使用者の地位を表していました。エッチング技術では、まず装飾する鉄の表面をワックスなどの耐酸性材料で覆います。その後、エッチング針で好きな模様を刻み込み、その上に酸を流します。耐酸性層の除去後、デザインが黒く染まります。



❺ 冷兵器の製造には2つの相反する要件を満たす必要がありました。すぐに摩滅しない硬い刃でなければならない一方で、柔軟性が折れを防ぎました。いわゆる刀鍛冶はこの技術を駆使しました。その優良な品質の証明は現在でも武器庫のほぼ全ての剣、サーベルおよびエペに見られます。



❻ 武器の進化は戦術を変えました。例として、歩兵の価値が上がりました。最大15キログラムになるこの円盾により、歩兵部隊は銃撃から身を守ることができました。



❼ いわゆるツーハンデッドソードは、敵の槍兵の列を突破するのに使用されました。長さが最大2メートルということもあり、両手で扱う必要がありました。そのため兵士は特別な訓練を必要としましたが、より多くの給料を稼ぐことができました。



建築と運用

グラーツ武器庫はシンプルな実用建築として構想されました。4フロア、延床面積2,000 m^2には、軍事装備が目的に応じた基準で、できるだけコンパクトに整然と保管されていました。地上階には大砲、上階の棚、天井および壁には小銃、ピストル、甲冑そして長柄武器が保管されていました。松明は照明の役割をしていました。

武器庫は領邦等族によって出資されていたため、建築の歴史と運用について多くのことが分かっています。具体的に名前が挙げられた107人の職人、御者、筏師および日雇い労働者が、建物の建設過程において給料として支払われた13,738グルデン 1シリング 21プフェニを分け合いました。

武器庫の日常的な運用には厳選された少人数のグループのみが関与していました。武器庫の指揮は用具係が担っていました。チームと共に、武器の注文、保管、配給を行なっていました。その他の任務には、品質管理、小規模な修理作業、地域の防衛施設および軍事境界線への武器輸送などがありました。

2026年から、この州立武器庫は欧州文化遺産ラベルに登録されており、とりわけヨーロッパの歴史と今日のヨーロッパの発展を代表する一連の素晴らしい文化遺産および景観の一つに数えられています。

EUROPEAN HERITAGE LABEL

テキストとコンセプト：州立武器庫チーム | 日本語訳：Y'plus, Ryunosuke Sannomiya
写真：UMJ/N. Lackner I 図：Andrea Weishaupt、Katharina Schwarz